
虚像の追跡者-Pursuer-

楼蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚像の追跡者―Pursuer―

【Nコード】

N0581X

【作者名】

楼蘭

【あらすじ】

工藤新一が江戸川コナンとなって九年の歳月が流れた。十五歳になったコナンを内なる敵が追い詰める。

P r o l o g u e (前書き)

前作「真実へのC o u n t d o w n」では、本当に有り難う御座いましたm () m

前作に続いて二作目の組織物の小説になりますが、前作とは違って組織色は若干薄くなると思います……多分？

この小説はのんびり更新する予定です。下手すれば二〜三日に一回の更新になるかも知れませんが、宜しく願いますm () m

P r o l o g u e

「ICPOに友人がいる、彼等に頼んで、奴等の組織の事を探って貰う事にしよう。その内、例の薬が手に入りお前の体も元に戻るだろう」

「だから、危険な探偵ごっこは、もう終わり「やだね!!」」

「これは俺の事件だ、俺が解く!!」

「父さん達は手を出すな!!」

「それに……俺は未だ、日本を離れる訳にはいかねえんだ……」

「新」

「まあいい、暫くこいつの好きにさせてやるか?」

「あなた……」

「その代わり、危なくなったら、直ぐに外国へ連れて行くぞ」

「それに……他にも日本を離れたくない理由がありそうだ」

米花ホテルの301号室で、交わされた

……父優作とのある約束

この時の俺は、未だ気付いていなかった……

あの時の、約束の言葉には……

—無理があると言う事実—

移り行く想い

工藤新一がトロピカルランドで幼児化して、早九年の歳月が経っていた

あまりにも長すぎた九年と言う長い歳月は、表面上穏やかな時を刻むコナンの強靱な精神を、着実に蝕んでいた……

帝丹中学校の帰り道にある川沿いの通学路

学ランに身を包み、学生鞆と空手胴着を肩からぶら下げたコナンは、傍らを歩く哀に声を掛けた

「おめえさ、俺が部活終えんの、わざわざ待ってなくて良いんだぜ？」

「別に待ってなんかいないわよ。私は薬学書と呼んでいるだけで、偶々部活を終えた貴方と帰ってるだけよ」

「なら良いけどよ……」

組織に通用する強さを身に付ける為、帝丹中学校空手部に所属す

るコナンが空手部の練習に出ている間、毎日と言って良い程、哀は必ず空手道場の近くで薬学書を読んでいた

まあ哀が素直になれる訳もなく、幾分類を染めて平静を装ってはいるが、哀が毎日コナンを待っている事は最早周知の事実、従って――二人は付き合っている――と、帝丹中学校では噂の的になっていた

コナンはと言うと、哀が待っている事に内心笑みを溢しており、そんな自分がある事をちゃんと解っていた

（素直じゃねえ奴？）

何時もの様に、哀と二人で夕陽に照らされた道を歩いていると、新出智明と口付けを交わす蘭の姿が、目に飛び込んで来た

「どうかし……」

突然、立ち止まるコナン

怪訝に思った哀がコナンに声を掛け様として、その光景に言葉を失った

（蘭さんと新出先生……）

ここで蘭が新出を拒絶していたなら、コナンは全速力で駆け付けて蘭を助けていたに違いない

だが、目の前の蘭は抵抗する事なく新出を受け入れて、嬉しそうに微笑んでいた

そんな仲睦まじい二人を、無言で見つめるコナンの左手をそっと握り締めた哀は、一言だけ言葉を紡いで立ち竦したコナンを促す

「行きましょ」

哀に促されたコナンは、再び歩き出した

「ああ……（Thank You……灰原）」

蘭と新出が三年前から付き合っている事は、コナンも知っていた

……待たせたのは自分自身だから仕方がない……

――それで蘭が幸せならいい――

と……自分に対して何度もそう言い聞かせたコナンは、蘭の幸せの為に涙を吞んで三年前に一度別れを告げた

だが当の蘭は受け入れられず、身勝手だと解っていてもコナンを手離せなかった

しかしながら血の繋がりが無い成熟した蘭との同居は、第二次性徴期を迎えたコナンにとっては、肉体的にも精神的にも好ましくない過酷なもので、コナンが頻繁に工藤邸へ泊まる事で良好な関係を保って来た

奥手とは言え多感な時期を迎えた上に、蘭と新出が寄り添う姿を見掛ける度、傷付いて来たコナンを支えたのが他ならぬ哀だった

……もし哀がいなかったら？

コナンは一人では立ち直れなかっただろう……

無言の儘で歩き続けた二人は、二丁目と五丁目の別れ道へ差し掛かると、哀が何時もの様にコナンへ声を掛ける

「今日……、隣に泊まって行くんでしょ？」

こんな時のコナンが、居候先である毛利探偵事務所には、絶対に帰らない事を哀は良く解っていた

九年間と言う空白に依って生じた新一と蘭の亀裂と、姉弟の様に過ごしたが為に最愛の蘭を失ったコナン

中途半端な状態を強いられているが故に、深く傷付いているコナンを放って置けば、広大な工藤邸で何も食べない儘一日を過ごして仕舞う

その為、哀は必ず声を掛けていた

自分を案じて優しく包み込んでくれる哀に悪いと思いつつも、コナンは何時も誘われる儘に頷く

「……ああ、そうだな。今日は自宅に泊まってくか？」

「そう、なら夕食を用意するから寄って行きなさい」

「Thank You……灰原」

哀の包み込む様な優しさに甘えてコナンは、素の自分を曝け出せる数少ない場所である阿笠邸に立ち寄った

「ただいま、博士」

「邪魔するぜ、阿笠博士」

「おかえり哀君、新一」

鞆をソファーに置き、崩れ落ちる様に腰を下ろすコナンを案じた阿笠博士は、自分用に入れた珈琲をコナンに差し出した

「何か疲れとる様じゃの、新一」

「まあな……、Thank You」

香り立つ珈琲を受け取ると、コナンは心を落ち着かせる様に一口飲み込んだ

何時もと違って覇気のないコナン、阿笠博士は直ぐに異変を感じ取った

（何事かあった様じゃの……）

心配でならない阿笠博士は、着替えて来たばかりの哀にそつと声を掛けた

「哀君……」

阿笠博士が何を言いたいのか？

全部聞かなくても解る哀は手短に経緯を話した

「川沿いの土手で、蘭さんと新出先生がキスしてたのよ」

「！！　そうじゃったのか……」

幼い頃から蘭に一途だった事を知っている阿笠博士は、コナンの胸中を思い表情を曇らせた

(新一……)

「蘭さんを忘れるには、もう少し掛かりそうね」

「そうじゃの……、新一は小さい時から蘭君にべた惚れじゃったからの」

「せめて、中学に上がると同時に毛利探偵事務所を出ていれば、まだ割り切る事も出来たじやろうが、蘭君が新一を頑なに手離さんからの」

「ええ、蘭さんは江戸川コナンと工藤新一を重ねてるから、工藤君を手離したくないんでしょね……」

「そうじゃの……」

少し離れた場所から、無言の儘見守る哀と阿笠博士の視線の先には、覇気をなくして項垂れるコナンの姿があった……

名探偵の涙

この日、当たり障りのない会話を交わした後、本来の自宅である工藤邸へに戻ったコナンは、月明かりの射し込む私室で膝を抱えていた

（蘭……、新出先生と結婚するんだろうな。もう九年……、しゃあねえか）

携帯を手に取り時刻を確認すると、既に深夜0時を差そうとしていた

（この時間は未だ起きていたな……）

意を決したコナンは、けりを着けるべくアドレスを呼び出して、蘭の携帯へ新一として電話を掛けた

数回の呼び出しの後、繋がった筈の通話口からは……

無情にも無機質なアナウンスが響いた

「「この電話番号はお客様の希望によりお繋ぎ出来ません」」

「!! (着信 拒否かよ……)」

あまりのショックに茫然となったコナンは電話を切り、ベッドへ倒れ込むとシーツをきつく握り締めた

(蘭………)

四方や着信拒否をされるとは、夢にも思わなかったコナン

深く傷付いた心を持て余して、拳を握り枕に顔を埋めて嗚咽を漏らした……

工藤新一と江戸川コナンの初恋が儚く散ったこの夜から一週間、コナンは受けた傷を癒すかの様に自宅である工藤邸に閉じ籠った

この間、哀は食事の用意をする傍ら、頻繁に部屋を訪れてコナンを支えていた

「工藤君、朝食を持って来たわ」

哀が声を掛けて暫くすると、真っ赤な目をしたコナンが扉を開けた

(泣いていたのね……)

「何時もわりいな……灰原」

「それは良いけど、貴方 無理にでも食べた方が良いわ」

「食欲はねえけどな……、風呂に入ってから食べるよ」

「じゃあ、下に用意して置くから」

「わあった」

お風呂から揚がり食事を取ったコナンは、壊れたオルゴールの様に蘭に着信拒否をされた事実を吐露した

「蘭に……着信拒否されてた……」

「……え？」

（蘭さんが、着信拒否？ そんな……あんまりだわ）

まさか蘭が着信拒否をしていた衝撃的な事実には、哀は茫然となつて目を大きく見開いた

「ははは……、ここ迄嫌われてたなんてよ」

深く傷付き懸命に涙を堪えて項垂れる、あまりにも弱々しいコナンの姿に、哀はただ胸を締め付けられた

「工藤君……」

この三年間、事ある毎に傷付いて来たコナン

哀は堪らず傍らの席に座って、傷付いたコナンを優しく抱き締めた

「！！ 灰原……」

コナンは少し驚きはしたものの、心地よい哀の温もりに涙を溢れさせる

「辛い時は泣きなさい、私が全て受け止めてあげるから我慢しないで」

「（……灰原） 格好悪いだろ……」

懸命に平静を装うコナン

「あらそう？ 私はそうは思わないわ」

全部吐き出して楽になりなさいと、言外に告げる哀の優しさに、コナンは一筋の涙を流す

「Thank You……」

「……ちくしょう」

哀に寄り掛かって涙を流すコナンと、優しく抱き締める哀の姿を阿笠博士は静かに見守った

（新一……哀君……）

哀に寄り添われた一週間、少しずつ落ち着きを取り戻し始めた矢先に、これ迄コナンを避けていた蘭が様子を見に来て仕舞った

哀と阿笠博士の制止を振り切り、部屋に籠っているコナンの元へ向かう蘭を追う哀と阿笠博士

「ちょっと待ってくれんか、蘭君？」

「新出先生と深い付き合いをする様になって、工藤君を避けていたからてっきり来ないだろうと油断していたわ」

「ああ？」

自分が元凶とは思ってもいない蘭は、コナンに声を掛け続けた

「コナン君、大丈夫？　コナン君」

部屋の扉を叩きノブを回して、中にいるコナンへ無理矢理にでも会おうとする蘭

阿笠博士と哀がこの暴挙を許す筈もなく、蘭をコナンの部屋から

遠ざけるべく言い放った

「蘭君、済まんが帰ってくれんかの」

「え、阿笠博士……？」

理解出来ず首を傾げる蘭に対し、二人はきっぱりと言い放った

「コナン君は、蘭君と新出先生の関係にショックを受けて酷く傷付いておるんじゃない？」

「こう言っちゃ悪いけど、蘭さんがいたら江戸川君は永久に出て来ないわ。三年前、別れを告げた彼を無理矢理引き留めた癖に、今では避けて傷付けてるじゃない？」

「少なくともコナン君が落ち着く迄は、そっとして置いてくれんかの」

コナンを思う阿笠博士の言葉と、蘭を責める哀の言葉を受けて、蘭は自分がコナンの心を傷付けていた事を思い知った

（私が……コナン君を傷付けた？）

茫然と立ち竦む蘭

哀と阿笠博士は尚も言い放つ

「今、江戸川君は漸く落ち着いて来てるの。これ以上彼を振り回して傷付けないで頂戴」

「済まんが、帰ってくれんかの……」

「解りました……」

阿笠博士と哀に事実を突き付けられた蘭は一礼すると、後ろ髪引かれる思いでその場を後にした

（ごめんね……コナン君）

蘭の後ろ姿を見送った哀は、ぽつりと呟いた

「ごめんなさい……お姉ちゃん」

阿笠博士が蘭を見送りに玄関へ降りると、コナンは漸く姿を見せた

「何時もわりいな、灰原」

閉じ籠っている自分の代わりに、哀と阿笠博士に蘭の対応をさせて仕舞ったコナンは、部屋から出るなり済まなそうに謝った

だが、余程思う所があったのか、哀は腰に手を当てて小さな溜め息を吐いた

「良いのよ、蘭さんには一言言いたかったから丁度良かったわ?」

「蘭に?」

蘭に対して哀が何を思っているのか、皆目見当が着かないコナンは首を傾げて哀に問い返す

数秒の沈黙の後哀は、その想いを語った

「私達が中学に進学した三年前、蘭さんは新出先生と付き合い出していないながら、工藤新一に酷似した貴方を頑なに手離さなかったわ。

それなのに、今では工藤新一を着信拒否した上に、瓜二つの貴方を避けているじゃない」

「三年前の貴方は工藤新一として江戸川コナンとしても、蘭さんの為に別れを告げた。それなのに工藤新一に似てるからって避けるだなんて、自分勝手にも程があるわ」

「……灰原、ありがとな……ほんと」

「別に私は？」

頬を染めて横を向く哀

コナンは満面の笑みを湛えていた

「哀君の言う通りじゃな」

「阿笠博士」

蘭の見送りを終えた阿笠博士は、一言だけ残念そうに呟いた

「三年前、蘭君が受け入れてくれればの」

「ああ、無理矢理にでも出れば良かったんだろうけどな？」

「あの時は仕方ないわよ？」

「そうだな？」

「で、どうするんじゃない？」

三年経った今、再び決断の機会を得たコナンは毛利探偵事務所を出る決意を固めた

「近日中に毛利探偵事務所を出る」

父娘

阿笠博士に見送られて工藤邸を出た蘭は、ふらつく足取りで自宅である毛利探偵事務所へと続く道をとぼとぼと歩いていた

何時もの笑顔は消え失せ、焦点の合わない目をした覚束ない足取りの蘭と擦れ違う人々は、一様に怪訝な眼差しを向けた

「ねえ、あれって毛利探偵の所のお嬢さんよね？」

「ええ、そうよ。一体どうしたのかしら？」

周囲の声も聞こえず、ただ歩き続ける蘭の脳裏には、先程、哀と阿笠博士に言われた言葉が響いていた

「コナン君は、蘭君と新出先生の関係にショックを受けて酷く傷付いておるんじゃない？」

「こう言っちゃ悪いけど、蘭さんがいたら江戸川君は永久に出て来ないわ。三年前、別れを告げた彼を無理矢理引き留めた癖に、今では避けて傷付けてるじゃない？」

＞今、江戸川君は漸く落ち着いて来てるの。これ以上彼を振り回して傷付けないで頂戴＜

＞済まんが、帰ってくれんかの＜

殆ど無意識の内に自宅があるビルへと戻った蘭は、呼び止める小五郎の声も耳には届かない様子で、三階への階段を上って行った

「帰ったのか、蘭。コナンの様子はどうだったんだ？　おい、蘭
！！」

完全に外界を遮断した蘭の姿、流石の小五郎も何事か起こった事を察した

「……何かあったな」

恋愛は当事者の問題故に傍観を決め込んでいた小五郎だったが、項垂れる娘の姿を見るに見兼ねて、蘭の部屋の扉を数回ノックした

「おい蘭、コナンと何かあったのか？　何なら相談に乗ってやるぞ？」

愛娘を心配する小五郎の声に、蘭は数秒の沈黙の後、部屋の扉を開けた

「……一体何があった？」

涙に濡れた娘の頭を、幼い頃のように優しく撫でる小五郎の表情は、父親以外の何者でもなかった

「お父さん……、コナン君に……新一に酷い事しちゃった」

「そうか……（やっと気付いたか？）」

父親の胸で啜り泣く蘭

小五郎は父親として人生の先輩として、幼い恋を未だに引き摺る蘭に言葉を紡いだ

「いいか蘭……、恋愛ってのはな、待ってるだけじゃ逃げちゃあゝ駄目なんだよ。ぶつかり合うの時には必要な事だ」

「え？」

怪訝な顔で父親を見上げる蘭

小五郎は男の立場から言葉を紡ぐ

「例え会えなくてもな、あらゆる媒体を使って相手を支えなきゃならんねえ。探偵坊主が姿を消してもう九年だ、とんでもねえ事件に巻き込まれている事は間違いないんだよ」

「とんでもない事件って？」

「これは俺の想像でしかねえが、探偵坊主は、トロピカルランドで何だかの事件に巻き込まれたんだ」

小五郎の言葉で、何かが蘭の脳裏を掠めた

（何……今の……、何かを思い出し掛けた様な気がしたけど……）

「探偵坊主はその事件が元で姿を消した……と見て先ず間違いないだろう。そうなれば、周囲の人間に危害が及ぶのは必定、要するに蘭……おめえが一番危険なんだ」

「!!」

父親が発した言葉に驚愕する蘭

小五郎は尚も言葉を続けた

「死んだ事になっている探偵坊主は、蘭おめえを守る為に姿を消し影から守って来た筈だ。もしも仮に、江戸川コナンと工藤新一が同一人物だとしたら……工藤新一を待たない、だが江戸川コナンとして側にいて欲しい、でも見るのは辛いから避けるってのはあんまりじゃねえか？」

「俺が探偵坊主の立場だったら、間違いなく同じ事をするだろうよ……蘭、おめえと英理を守る為に、俺は自分を殺す」

「そりゃあ父親としては、散々おめえを泣かせて来た探偵坊主が腹立たしいがな？」

「二人の男としては理解出来る」

「……お父さん」

父親の推理を聞いて立ち竦む蘭

九年の歳月を得て、蘭は記憶の底に埋もれている出来事を思い出そうとしていた

「私……私……」

「良く考えろよ、蘭」

優しく諭す小五郎に小さく頷くと、蘭は父親の言葉を重く受け止めて一人、部屋で考え込んだ

（もし……もしも、お父さんの言った事が本当だったとしたら？）

（私は新一に対してとんでもない事をしたって事？）

（ごめんなさい……新一）

（ごめんね……コナン君）

（私はちゃんと向き合わなきゃならなかったんだよね……）

（例えどんなに傷付いたとしても、ぶつかり合ってもう待てないって伝えなきゃいけなかったんだ）

（ごめんね……、でもなんだろう？）

（何か引っ掛かってる……何かを忘れてる様な……新一がいなくなったあの日、何かを見ている気がする……重要な手懸かりを……新
一）

在って然るべき物（前書き）

早速お気に入りの登録&評価して頂いて本当に有り難う御座います
m (m

漸く自分の気持ちに気付いたコナンです……コナン鈍すぎ？

在って然るべき物

コナンが部屋へ閉じ籠ってから十日後、一つの節目を迎えていた

何時の如く、突然ロサンゼルスから帰国して来た優作と有希子、工藤邸に設けられている家族用のリビングで向き合っていた

「これが、お前の戸籍だ」

「慧一・コナン・工藤・アメリカ国籍だ、高等部進学はこれで大丈夫だろう」

「Thank You……父さん」

コナンが嬉しそうに受け取った物……それは、アメリカ合衆国の出生証明書とパスポート及び外国人登録証明書

義務教育期間の終了に伴って、無戸籍状態であるコナンの就学が出来なくなった事で、優作は哀とコナンの戸籍を作成していた

「新一……、LAに来ないか？」

「ね？そうしょ？新ちゃん？」

阿笠博士から、事の経緯を聞いている優作と有希子は、この三年間帰国する度に渡米を促していた

「俺と有希子は未だ日本国籍だが、永住権を既に取得しているし、老後はLAで過ごそうと思っている。そうなればお前の渡米も時間の問題ではあるな」

「・・・良い機会だとは思うけどよ」

（蘭とは終わったし、この所奴等とは平行線の儘で進展がない……一旦、LAに渡米して、静養するのも良くはあるけどよ……）

俯き思案に暮れるコナンは何故か、未だに迷っていた

「これ以上新ちゃんが傷付くのは嫌よ？LAにいらっしやい？」

「まあ落ち着け、有希子」

「だって優作？」

何とかコナンを連れて帰ろうと懸命に説得する有希子

優作もまた内心は有希子同様、コナンを案じつつも逸る気持ちを抑えて、選択権をコナンに委ねた

「卒業迄は少し時間があるんだ、そう急ぐ事はないさ」

「でも」

愛妻の肩を抱いて宥めながら、優作はコナンに決断を促す

「良く考えて決断しなさい」

「わあった……、Thank You父さん母さん」

決断を迫られ目を伏せるコナンの脳裏には、この三年間、常に傍らでコナンを支えて来た哀の姿があった

（蘭とはもう終わってはいるが、灰原もいるし……、って何であいつが？）

「新ちゃん、どうしたの？」

突然、顔を真っ赤にして慌てるコナンを見て察しが付いた優作は、然り気無く背中を押した

「ほく成る程な、どうやら気になる娘がいる様だな♪」

「そんなんじゃないよ?」

「その顔じゃ白状したも同然よ、新ちゃん」

「差し詰めお相手は哀君かな♪」

「あら〜やっぱり哀ちゃんなの♪」

完全にからかいモードへと突入した二人に、一頻りからかわれて漸く自覚したコナン

蘭へ別れを告げたあの日から、三年の歳月が流れ様としていた

「うっせ?」

(何時の間にか……あいつに捕まっちゃったな)

哀を想うこの時のコナンの表情は、嘗てない位の優しい微笑みを浮かべている事に、コナンは気付いていなかった

「やれやれ?」

「そんな顔されたんじゃない、からかう気も起きないわ?」

「は?」

自分がどんな表情をしているか、全く自覚がないコナンの顔面はもう真っ赤だ

「早く告白して一緒に連れて来い?」

「さっさと告白しないと、鳶に油揚げ浚われるわよ」

「んな真似させっかよ？」

まさか両親に自覚させられるとは思ってもいなかったコナン……

独占欲だけは人一倍強かった

（他の男に渡して堪るか？）

（相変わらず独占欲強いんだから？）

満面の笑みを浮かべたと思えば嫉妬で怒りを露にする、表情豊かな我が子の姿に、優作と有希子は笑みを浮かべた

（世話の焼ける奴だ？）

（もう大丈夫ね♪）

「なあ父さん、家はどうすんだ？」

突如 正気に戻ったコナンは、脱線していた渡米に伴う問題へと無理矢理に話を戻した

「そうだな、築年数二十五年を経過して老朽化も進んで来ている、何れは取り壊す事になるだろうな」

「そっか……」

「新ちゃんが育った家だから寂しいけどね」

「形ある物は何れは形を失う物だ、仕方ないさ」

「じゃあねえよな」

思い出の詰まった工藤邸

一抹の寂しさを感じてコナン達は暫しの間想いを馳せた

「まあ、この家の処遇はお前次第だ」

「新ちゃんはどうしたいの？」

有希子が心配そうに声を掛けると、コナンは表情を曇らせてもう一つの問題を告げた

「正直な所、今は推理したくねえんだ。嘗ての工藤新一を求められて嫌気が差してる……」

「高校生探偵工藤新一は最早存在しない、にも拘わらず目暮警部は江戸川コナンではなく過去の亡霊工藤新一の幻影を求めるんだ」

「……目暮警部が待っているのは今の俺江戸川コナンじゃねえんだ」

「九年前に死んだ工藤新一の亡霊を待ってる」

幾分、疲れた表情で現状を憂うコナンを見た優作は、日本警察の現状を察して深い溜め息を吐いた

「そうか？」

「優作……、やっぱり静養させた方が良くないんじゃない？」

心身共に疲れきっていると判断した有希子は、優作に判断を求めて振り返った

「ああ……そうだな」

「一度日本を離れて静養した方が良いかもしれない。九年間組織と渡り合った事もあって疲れてるんだろう」

「目暮警部には私が話して置く。元々、未成年に捜査協力させる事態が間違っているのだからな」

「そうね、新ちゃんは未だ高校生だったのに、授業中に呼び出して迄捜査協力させるのはどうかと思うわ」

「学業に支障がない範囲なら未だましも、出席日数が危うくなる程呼び出して貰っては困る」

「父さん……母さん」

てっきり、甘えるな、と諭されるとばかり思っていたコナンは、配慮を欠いた目暮に対して眉を顰める優作に驚いていた

「お前も呼び出しさえなければ、現場には行かなかったんだろう？」

「そりゃあ、授業中だったしな」

「今はどうなの？」

「保護者であるおっちゃんの手前、頻繁ではねえけど……」

コナンが言葉を濁すと、優作は言葉にならなかった先を察した

「成る程な……、毛利さんが留守で手を借りられない時に呼び出すのか？」

「ああ……」

「解った、日本警察は私が話を付ける。お前は暫く静養しろ、良いな？」

「わあった……Thank You」

九年もの長い間、極度の緊張状態を強いられたコナンの精神は、限界に達していた

如何に優れた探偵と言えども、コナンはプロではなく、一般人に過ぎない

一向に進展しない組織との攻防に加えて、都内で勃発する難事件、更には中途半端な関係を強いられた蘭の存在

これらの諸問題が不運にも重なりコナンの精神を疲労させ、最早爆発寸前迄来ていた……

「ところで哀君は？」

「学校行ってるけど、灰原がどうかしたのか？」

不意に哀の話題に変えた優作にコナンが怪訝な声を上げると、優作は哀のパスポートを取り出した

「彼女の戸籍も作って置いたんだ、阿笠博士の養女になると決まっていただろう？」

「良い機会だから、阿笠玲美の戸籍を作ったって訳♪」

「そっか、あいつも喜ぶだろうな」

「哀ちゃん、喜んでたんでしょ？」

「ああ、阿笠博士は親代わりだからな。喜んでたぜ、帰ったら来るんじゃないの？」

久し振りに親子の会話が弾んでいると、穏やかな空気を切り裂く様に着信音が鳴り響いた

「・・・」

無言の儘携帯を取り出し待受を確認すると、相手は目暮警部だった

「……はい、コナンです」

浮かないコナンの表情で相手が解った優作は、鋭い眼差しを向けた

「……はい、解りました」

電話を切り深い溜め息を吐くと、コナンはゆっくりと腰を上げた

危惧

「行くのか？」

浮かない表情の儘、目暮からの呼び出しに応じ様とするコナンに、優作は一言だけ言葉を紡いだ

「ああ……」

「無理しないでお断りしたら？」

優作も有希子も精神的疲労が著しいコナンが心配で引き止めるが、行かない訳には行かなかった

「そうしてえけどな、あいつ等が目撃しちまってるみてえだから……」

「あら、哀ちゃん達が発見者なの？」

「ああ、下校途中に遺体を見付けたらしいんだ」

「それなら仕方がないな？」

コナンの言葉を受けて立ち上がった優作は、支度を整えるべくリビングを後にする

「あら……、優作も行くの？」

「今の新一は崖っぷちだからな」

「なら私も行くわ？」

そう笑顔で告げながらリビングを後にする両親の気遣いにコナンは思わず笑みを溢した

(Thank You……)

支度を整えて事件現場に向かい車から一足先に降りたコナンは、真っ先に哀・元太・歩美・光彦の姿を見付けた

「おい、おめえら」

「あ、コナン君!!」

「コナン!!」

「出歩いて大丈夫なんですか？」

「おめえ顔色わりいぞ？」

十日間も学校を休んだコナンの姿を見るなり、一斉に駆け寄ると歩美が真っ先にコナンの体を気遣う

「コナン君、無理しちゃ駄目だよ？」

「Thank You、でも大分良いんだ」

と、コナンは務めて明るく振る舞うものの、顔色は決して良いとは言えなかった

（少しは顔色良くなってるけど、体は怠そう……）

（無理してますね、コナン君）

（大丈夫じゃねえだろ？）

何処か翳りのあるコナンの笑顔元太達は本調子でない事を直ぐに悟った

「突然呼び出してごめんなさい、江戸川君」

十日間、コナンに付き添った哀は傍らに佇むと本調子でないにも拘わらず、呼び出して仕舞った事を我が事のように謝罪して来た

「別に良いって、おめえのお陰で随分楽になってんだぜ？」

「なら良いけど、顔色が悪すぎるわ」

何時もの笑顔で話す二人の対面では、元太達が呼び出した目暮に怒っていた

「随分と止めたんだけどよ？」

「警部さんってば聞いてくれないのー！！」

「来れる様ならって言ってましたが、コナン君が断れない事を知って呼んでますからね」

仲間想いの元太・光彦・歩美

コナンを殊の外案じる元太達は、目暮を睨み付けて怒りを露にしていた

「歩美、絶対に許さないんだから!!」

「全くです?」

「そうだよな!!」

「「はい・うん!!」」

「ありがとな……」

三人の温かい想いに、コナンは哀と顔を見合わせて笑みを溢し、強力な助っ人を指差した

「けど大丈夫、今日は目暮警部が頭が上がらない助っ人がいつからよ」

「「え？嘘？」」

見事にハモった三人の視線の先には、悠然と近付いて来る優作と有希子の姿があった

「ちょっと、貴方ね？」

「じゃあねえだろ、俺が本調子じゃねえんだ」

「そう、流石に思う所があったのね」

「……日本警察に抗議するってよ」

「あら、面白そうね」

真剣なコナンに対して幾分面白がっている哀、コナンはそれとは言わずに小さな溜め息を吐いた

「バーロ、お陰で厄介な問題が浮上してんだよ？」

「厄介な事って？」

意味深なコナンの言葉に表情を険しくする哀の隣では元太達が驚いていた

「やあ」

「皆、大きくなったわね」

「「こんにちは？」」

「ご無沙汰してます？」

「わざわざ済みません……」

「いや……構わないよ、呼び出したのは目暮警部だからね」

何時もの悠然とした笑みを湛える優作だが、流石に今回は目暮に
対して静かなる怒りを覚えていた

コナンの到着に気付き目暮が掛けた言葉は、
「コナンくではなく
工藤くだった」

「おー工藤君、待っとったぞ」

「・・・遅くなって済みません」

複雑な心境で無理矢理笑顔を作るコナン、優作と元太達は其々に
声を上げた

「この子は新一ではありませんよ、目暮警部」

「優作君じゃないか!!」

「ご無沙汰してます」

「もう警部さんったら、コナン君は新一お兄さんじゃないってば!
」

「まったく何回間違えるんだよ!!」

「間違えると言うよりは、コナン君に新一さんを重ねてると言った所ですね」

「そうだね」

「はっきり言って人権無視ね」

「全くです!!」

「そうだそうだ!!」

元太達に口々に責められた目暮は、上辺だけの謝罪を繰り返すに留まった

「いやー、済まん済まん」

優作や元太達の抗議も、大して気にも留めない目暮は優作とコナンを現場へと案内した

「まったく、全然解ってねえぞ!!」

「ええ」

「まあ、優作さんに任せましょ？」

「哀ちゃん？」

仲間想いの腹立たしげな元太達の声聞いた高木警部補は、心底
済まなそうに声を掛けて来た

「ごめんよ……皆、僕や美和子さんも言ってるんだけどね」

「高木刑事」

「全く効果ねえよな!!」

「そうなんだよ……、この儘ではコナン君を失う事態になり兼ねない。それだけは何としても避けたいんだ……」

「工藤新一君に続きコナン君迄も失う事は、日本警察の大損失なんだよ」

沈痛な面持ちで言葉を紡ぐ高木と元太達は、年齢差を越えて真剣に話し合っていた

「でもコナン君はもう限界だよ？」

「江戸川君の精神は崖っぷちに來てるわ。何が起こるか解らない状況だから、今の彼に推理をさせたくなかったのよ」

腕を組んで言い放った哀の言葉を真剣な表情で聞いた高木は、背後を振り向き最後の切り札である優作を見つめた

「もう、目暮警部の親友でもある工藤優作氏に任せるしかない」

「……優作さん、日本警察に抗議するそうよ」

「え、ほんとかい？」

「ええ、彼が言ってたから間違いないと思うわ。それだけ江戸川君の精神状態は深刻なのよ」

「もしコナン君の精神が破綻し、上層部が動けば目暮警部はただでは済まなくなる……」

「目暮警部が気付くしかないわね、警部さんは今工藤新一の亡霊を見てるんだもの……」

複雑な表情を浮かべた高木は、新米刑事当時からの上司を案じて目暮の背中を見つめていた

「じゃあ、何か思い出した事があったら教えてくれよ」

「うん、高木刑事に教えるね」

「間違っても目暮警部には教えねえぞ」

「元太君、それはちょっと？」

幼少時からの協力者である、元太達の根深い怒りと不信感を買って仕舞った目暮

高木はただ静観せざるを得なかった

(目暮警部……)

逆鱗（前書き）

お気に入り登録&沢山のアクセス本当に有り難う御座いますm（
┌ m

タイトルの逆鱗は怒らせると一番怖いであろうあの人を怒らせちゃ
いました……

まあ、誰にでも逆鱗ですが？

逆鱗

当の目暮は高木の危惧等気付く事なく、哀達が発見して仕舞った遺体を優作とコナンに見せていた

「被害者は四十代後半と思われる身元不明の外国人の男性と三十代後半と思われる外国人の女性で、見ての通り全身が黒尽くめの出で立ちでな」

殺害されていたのは……

何と、組織の狙撃手であるキャンティとコルンだった

（今度はキャンティとコルン……）

自然と険しい表情になるコナン

傍らの優作は悠然とした笑みを浮かべ、然り気無く目暮を誘導し始めた

「目暮警部、身元が判らなければ我々にはどうする事も出来ませんよ？」

「やはりそうか……」

がつくりと肩を落とす目暮は、優作とコナンに期待していただけに項垂れていた

「優作君と工藤君なら、最近次々と発見されている黒尽くめの遺体の件で、何か知ってるかと思っていたんだが……」

「私はただの推理小説家ですし、コナン君は中学生に過ぎません。残念ですがお役には立てませんよ」

深く詮索されては困るコナンは、優作の言葉に口出しする事なく二人の遺体を眺めていた

（死因は頭部の一発……即死か）

（この十日間の間、かなりの数のメンバーが見付かっている……、一体奴等に何が起こってるんだ？）

コナンが思考を掘り下げて推理していると、目暮の一言がコナンの精神を撃ち碎いた

「わざわざ来て貰ったのに済まなかったな、工藤君」

「・・・（また……か）いえ、構いませんよ」

小刻みに震えるコナンを見て、優作は早々に帰宅する事にした

「コナン君ですよ、目暮警部」

普段より数段低い優作の声

優作が醸し出す殺気の片鱗を、流石に感じ取った目暮は畏縮して
謝罪する他なかった

「あ……ああ、済まない？」

「顔色が悪いな……」

「コナンちゃん、帰りましょ？」

「コナンちゃんに何かあったら、亡くなったご両親に顔向け出来ないわ？」

コナンを守る様に両脇から支えて目暮と引き離す優作と有希子

目暮に有無を言わずに、コナンと共に停めてある車へと向かった

「哀ちゃんも来てくれるかしら？」

「解りました、じゃあね」

「うん、また明日ね」

「おう！！」

「灰原さん、さようなら」

早々に車に乗り込み現場を離れたコナンは、車が発進した途端に後部座席に倒れ込んで意識を失った

「工藤君！！」

「新ちゃん？」

ついに限界を越えて倒れたコナン

真っ青な顔色で昏倒し呼び掛けに応じる事が出来ないコナンを、
哀は素早く容態を診始めた

（熱が高過ぎるし、脈拍も早過ぎる）

「もう限界だわ、病院へ向かって下さい」

「解った」

哀の言葉を受けて素早くハンドルを切った優作は、設備が整った
米花総合病院へと車を走らせた

意識を喪失した儘米花総合病院へ運ばれたコナンは、精密検査が
行われた後緊急処置が施された。度重なる精神的疲労から、高熱を
出し点滴を受けて深い眠りに就いているコナン

コナンの容態は予想より深刻な事態になっていた、組織の問題に始まり工藤新一に固執する目暮や中途半端な状態を強いられた蘭との関係等……

様々な問題に見舞われたコナンの精神は、九年間で積もり積もった疲労からついに限界を越えた

検査が終わり個室で眠り続けるコナンを見下ろしていた優作は、拳を握り締め殺気を迸らせながら踵を返した

「有希子、新一を頼んだぞ」

「ええ……（優作……）」

無言の儘で扉を見つめる有希子は、不安気な眼差しを向けていた

「有希子さん……」

息子の想い人である哀にすぎる様な眼差しを向けられた有希子は、哀の気持ちにくみ取り力なく横に首を振る

「ああなって仕舞った以上……、最早誰も優作を止められないわ。」

決して怒らせてはならない人を目暮警部は怒らせて仕舞ったんですもの」

「優作がその気になったら最後、世界中を敵に回すと言っても過言ではないわ、世界的推理小説家工藤優作はそれだけの影響力を持っているのだから……」

「そうですね……」

扉から視線を戻した有希子は、高熱で苦しむコナンを見つめてつぶつりと呟いた

「恐らく新ちゃんも気付いてるわね……」

「まさか……、そんな筈は……」

緩やかに首を振った有希子は、沈痛な面持ちで言葉を絞り出す

「ううん、これ迄にもチャンスは幾度となくあったわ、新ちゃんは薄々気付いていた……だからこそ九年も掛かって仕舞ったのよ」

「じゃあ……工藤君は……」

驚きと困惑が混じった複雑な表情を湛える哀

有希子は小さく頷いて呟いた

「ええ、新ちゃんは感付いてる。あの方の正体と組織の真実、そしてあの方に守られていると言う事に」

コナンの個室を後にした優作は、抑えていた殺気を迸らせていた

（よくも新一をここ迄……）

（新一が懇意にしていたから……）

（新一が想いを寄せていたから、多目に見て来た）

（漸くここ迄、漕ぎ着けて来て、後少しで解放してやれると言う時に！！）

（相応の報いは受けて貰おう……）

（目暮十三……毛利蘭……）

激怒した優作は、車に乗り込むなり携帯を手を取った

「もしもし、ご無沙汰しています。工藤優作ですが、これから少々お時間を頂けませんか？」

「はい……では後程、失礼します」

携帯を閉じた優作は、もう一台ポケットから漆黒の携帯を取り出し、ある人物へと電話を掛けた

「私だ、警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査三係の目暮十三と毛利蘭に脅しを掛けろ……殺す必要はない」

抗議（前書き）

お気に入り登録がもう二桁に？

登録して下された皆様本当——↓に有り難う御座います m
m？

今話の抗議編は台詞が多めになってます。ラストの方の会話は少々
立場が変化してます

抗議

コナンが意識を喪失している間……

優作は日本警察の象徴とも言うべき、警視庁最上階の一室にいた

「突然伺いまして申し訳ありません。お忙しい中、時間を割いて頂
きまして、有り難う御座います」

「いえ、それは構いませんが……」

恐ろしく慇懃な礼儀正しさと、優作が醸し出す触れる者を切り裂
く様なオーラ

来客用のソファアに腰を下ろす警視庁のトップ白馬警視総監は、
対面の優作が迸らせる殺気に全身の筋肉が畏縮して行くのを感じた

（凄い殺気だ……、一体何が？）

流石に一警部の動向等知る由もない白馬警視総監は辛うじて本題
を促した

「わざわざお越し頂いた用件を伺いしましょう」

額にうつすらと冷や汗を滲ませ完全に気圧される白馬警視總監に、優作は悠然足る態度で言い放った

「今日は私の息子の事でお伺いさせて頂きました」

「ご子息と言うと、工藤新一君ですか？」

怪訝な表情で問い返す白馬に対し優作は重々しく頷くと、もう一人の義息子コナンの名を告げた

「新一も関係していますが、今回お伺いしたのはコナン君の事です」

「江戸川コナン君ですか？ 確か、先日江戸川夫妻が事故で亡くなられた為、養子縁組を為されると聞き及んでおりますが……」

「ええ、息子に瓜二つのコナン君とは以前から妻と交流がありましたね……。それが縁で、事故で江戸川夫妻が亡くなられたのを機に養子縁組をしたんですが……。些か問題が起きているんですよ」

「問題？」

事の次第を知らない白馬は先が読めずに、怪訝な表情を浮かべながら優作の意図を計り兼ねていた

（一体何があったと言うんだ？）

「こちらの警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査三係に所属する目暮十三警部に、コナン君が度々呼び出されています」

ピクリと白馬の表情が強張り、眉が跳ね上がった

事件解決の為に長年の捜査協力を黙認して来た事を知っている優作は、他力本願で解決しようとする日本警察に対して怒りを覚えていた

双方共に互いを警戒する中で、優作は警視庁の長たる白馬警視総監に容赦なく斬り掛かる

「今のコナン君は様々な諸問題が重なり、精神的に不安定な状況が続いています。推理をしたくないと言う程、追い詰められて仕舞っている状況なんです」

「それにも拘わらず目暮警部は、不安定なコナン君を呼び出して、会う度に工藤君と呼んでいます」

「……要するに江戸川コナン君を工藤新一君と呼んでいると言う事ですか？」

「そうです、幾ら注意を促しても変わりません。先程も発見者である元太君光彦君歩美君哀君達の制止を振り切って呼び出した上、工藤君と呼んでいました。例えば仮にコナン君と新一が同一人物だとしても、コナン君を新一として呼ぶ事は、様々な事を経験し試練を乗り越えて成長して来た、江戸川コナンと言う存在を否定する事になるんですよ」

「……今、コナン君は？」

懸命に平静さを装ってはいるが、膝の上の拳は震え端正な表情は引き攣り、白馬の額からは冷や汗が流れ落ちていた

「この十日間は体調が優れずに、学校を休んで臥せていましたね、先程自宅へ戻る車内で昏倒して米花総合病院に入院しました」

「……！！（最悪だ……）」

完全にポーカーフェイスは崩れ落ち、頭を抱える白馬警視總監に
対し優作の言葉は止まる所を知らない、それ程に迄、優作の怒りは
深かった

「他ならぬ目暮警部だからこそ、息子共々協力をさせて貰って来ま
した。それを良い事に授業中にも拘わらず、ましてや体調が優れな
いコナンを呼び出して捜査協力を工藤新一である事を強いるとは、
了見違いも甚だしい!!」

「申し訳ありません!!」

ソファから立ち上がるなり、深々と頭を下げる白馬警視總監に
対し、優作は至って悠然と構えており鋭い眼光を放っていた

「息子達は自分で要請に応じはしましたが、何分二人とも学生です
から、自制が効きません。ですから呼び出すのは放課後の数時間の
みにして頂きたい」

「解りました、此度の部下の不手際誠に申し訳ありませんでした。
目暮十三警部は元より、警視庁内隈無く徹底した指導改善を早急に
実施致します」

警視總監の平身低頭たる姿に、漸く怒りを和らげた優作は深い溜

め息を吐いた

「宜しく願います、まあ、コナン君が倒れたのはそれだけではないんですがね？」

「何かあられたんですか？」

優作が表情を和らげた事で、漸く一息吐いた白馬は詳しい事情を聞く事となった……

「元々息子達はある事件に巻き込まれています。その為に精神的疲労を抱え込んでいましたが、それに加えて今迄お世話になっていた毛利探偵のお嬢さんが、息子に瓜二つのコナン君を避けているんです。顔を見るのが辛い、でも手離したくない。ですが第二次性徴期を迎えたコナン君は、蘭君を慕うが故に過酷な状況で追い詰められて仕舞ったんですよ」

「そうでしたか……、ただのお姉さんでしたら問題はなかったんでしょう。でもコナン君は本気で慕っていた……それ故に追い詰められ目暮警部が止めを刺して仕舞った……と言った所ですか」

「ええ、その通りです。今漸く解決に向かいつつあります。コナン君を新一だと連呼されるのは命に関わる、何がなんでも止めて頂かねば困るんですよ」

「……知らなかったとは言えども、一般人を命の危険に晒した事は紛れもない事実、目暮十三警部は厳しい処罰を与えます」

「私としてもここ迄するつもりはありませんでした、しかしながら二度も息子の命を失う事だけは、断じて避けなければならないんです。例えそれが許されない事だとしても……」

「……全ては罪もない国民の命を守る為です。貴殿方のその後に關しては我々が守り通します」

「有り難う御座います」

世界的推理小説家である工藤優作による、日本警察に対しての正式な抗議は警視庁中に知れ渡る事となり、本庁に戻った目暮十三は警視総監室にて嚴重注意を受けた後、上層部の処分の決定迄の間、自宅待機命令が言い渡された

迷路（前書き）

「真実へのC o u n t d o w n」 「虚像の追跡者－P u r s u e r
－」 共々お気に入り登録&沢山のアクセスをして頂いて、本当に有
り難う御座いますm () m

今話の「迷路」で組織の目的の一部が明らかになりますが……

真逆の設定です？

迷路

通常ならば、日本中に知れ渡り日本警察は糾弾の嵐と言った所だが、抗議を行った優作本人が内部処理を依頼した為、マスコミ各社及び世間に漏れる事はなく、極秘の内に処理された

今回の一連の騒ぎは当然この人の耳にも入った訳で、即ち名探偵ならぬ名刑事の雄叫びが轟いた

「なんやて———！！！」

「阿呆、静かにせんか！！！」

大阪府警本部最上階

本部長室で雄叫びを上げたのは、ご存知服部平次警部この人

「それ、ほんまなんか！！！」

父親の机に手を付いて詰め寄る平次に平蔵は淡々と答えた

「ああ、昨日コナン君が入院しはった後、工藤優作はんが本庁に抗議しはったんや」

「それで警部はん、処分決定の間自宅謹慎になっただんか？」

「そうや、えらい激怒してはるさかい相応の処分になるやろ」

「なんとかならへんのか？」

「無理やな、坊主の命が掛かつとる停職一ヶ月と言った所やろ？」

「まあしゃあないな？」

頭を掻いて小さな溜め息を吐く平次は懷から一通の書類を出した

「坊主の見舞いに行くさかい休暇取りたいんやけどええか？」

「……まあええやろ？」

「序でに本庁と目暮警部の様子を見て来い」

「わあった」

平次の休暇届に判子を押しながら仕事を言い付ける平蔵に対し、平次は文句を言わずに受け取った

「ほな、仕事戻りますよって」

敬礼し一刑事と上司の関係に戻り部屋を退出する平次に対して、余計な一言が飛んだのは言う迄もない

「確り捜査せえへんと休暇没になるで」

「わあっとるわ？」

扉の隙間から顔だけ出して返事をする平次は年相応の若者の顔だった

「くくく……、未々ガキやな」

「……もう少しや」

平蔵がぼつりと漏らした一言が平次の耳に届く事はなかった……

——翌日

「工藤!!」

米花総合病院へ駆け付けた平次は弱々しく横たわるコナンに目を見張った

(……無理しおってからに)

「よく、服部」

「まったく心配させおって？」

ベッドの縁に腰を下ろし溜め息を吐く平次の姿に、コナンは済まなそうに呟いた

「わりいな……」

「まあ、わざとやないんやし、かめへんって？」

「熱は下がったんか？ えらい高かったんやろ？」

「ああ、大分楽になったぜ」

「ならええけど……、何があったんや？」

横目でコナンを見下ろす平次は現役の警部だけあって鋭い眼差しを向けた

（そんな目で尋問すんなっての？）

平次の眼差しにものともしないコナンはその胸の内を吐露する

「別に大したこたねえさ……ただ俺の推理通りだったってだけさ」

「ほうか……」

「なあ、服部、正義ってなんだ？」

「……工藤」

「俺……解なくなっちゃった」

シーツを握り締めて、今では年上となった親友にやりきれない思
いを吐き出すコナン

嘗ては平次自身も悩み苦しんだ果てに通った道を今コナンが通っ
ている

少しばかり戸惑っている親友に対し平次は、嘗て自分が幼馴染み
に言われた言葉を告げた

「そないに、難しゅう考えんでもええんちゃうか？」

「え？」

平次の言葉に俯いていた顔を上げたコナンは怪訝な表情を見せた

「相手は国家や、あいつ等の悪事は国と法が守る。正攻法での立件

はどう足掻いても不可能と来れば、最早方法は一つしかあらへんやろ」

「お前はお前の正義を貫徹ばええんや、例えその唯一の方法が犯罪やとしてもな」

「……服部」

肯定されるとは思ってもいなかったコナンは、驚いた眼差しで平次を見つめた

「確かに方法は犯罪や、許される事やない。せやけどな、工藤……それは私利私欲やのうして、何の罪もない命を守る為にした事やで？」

「NOCは犯罪者やない、俺はそう思うとる。まあこの場合、NOCとはちいとばかり違うけどな………大本は変わらへんやろ、工藤？」

犯罪であれど犯罪者ではない

そう告げる平次

コナンは目から鱗が落ちた様に何時もの笑みを浮かべた

「……そうだな、俺は何を迷ってたんだ。ただ信じれば良いだけじゃねえかよ。俺の父さんと母さんそして灰原は犯罪者じゃねえってな」

「ただ国家犯罪を暴く組織を受け継いだだけの事だ、まあ研究関係のおまけはある様だけだよ？」

「それだけ、並々ならぬ訳があるっちゅう事やろな」

「そうだな、でも一体何の目的でAPT X4869を開発してプログラマーを集めてんだ？」

「それはトップシークレットや、ガードが固うて解らへん」

「おめえも知らねえか？」

「ああ」

お手上げの仕草に小さく毒づきはするものの、コナンは現地点で

判っている範囲で推理を掘り下げる

「ほんで、今どないなっとなるんや？」

「……秒読みって所だな」

「危険レベルのメンバーの遺体が相次いで見つかったんだ。本拠地の場所も判ってるし、後は時を待つだけだ」

「FBIは知っとんのか？」

「……恐らく、ジェイムズさんと赤井さんだけだな。後は知らねえと思う」

「ほな……連携は無理か」

「ああ、危険過ぎる。特にジョディ先生は感情的になるから……万が一の時は暴走しかねない」

「あの姉ちゃんは厄介やな〜？」

ガシヤガシヤと頭を掻いて知恵を搾る平次に対して、冷静に推理するコナン

「何か……方法があれば良いんだけどよ？」

「あの姉ちゃんも、まさかあの方以下幹部達がNOCとは思わへんやろな」

「そりゃそうだろ、組織の創立者自体がNOCだってんだからな？」

「驚くやろな」

「てめえ面白がってんだろ？」

大阪人の気質なのか事ある毎に面白がる平次を半眼で睨み上げるコナン

多少熱はあるものの、普段通りの笑顔を漸く見せたコナンに優作と有希子そして哀は、ほっと胸を撫で下ろしていた

（良かった……新ちゃん）

（漸く迷宮を抜けた様だな）

（ええ……ありがと新ちゃん）

（……ごめんなさい、工藤君）

（そして……有り難う）

（果たして真実を知ったお前は耐えられるか？）

蠢く闇（前書き）

お気に入り登録&評価

本当に有り難う御座いますm
〔
m

更新遅くなって済みません……

蠢く間

都内某所でジンが受けた指令は、殺す訳でもなく脅すだけでいいと言う奇妙なものだった

「脅すだけ……ですか？」

「そうだ、殺す必要はない」

「ターゲット本人でなくてもいい、最も大切な人物を痛め付けてくれればいい」

些か奇妙な指令だと思いはしたが、あの方の命令は絶対である為おくびにも出さず肯定の返事を返した

「解りました」

「頼んだよ……ジン」

「Yes, Boss」

昨夜の命令を思い返ししながら、ターゲットを睨むジンにウォッカが疑問を投げ掛ける

「脅せって一体どういう事なんですかね、兄貴」

「さあな……、俺達はあの方のご命令に従う迄だ」

「それはそうですが……」

そう言ってジンは、スコープを覗きながらターゲット新出智明へ向けて引き金を引いた

——ドウ！！——

一発の弾丸が放たれ、新出の車の前輪のタイヤを撃ち抜く

「うわっ！！パンクか？」

突然衝撃を受けた新出の車は、バランスを失いタイヤが悲鳴を上げ始める

路面と接触し火花を散らすタイヤ、新出は懸命にハンドルを操作するものの、右側前方にある電柱へ激突して漸く停止した

―ドオン！―

「つ……、ついてないな」

激突の衝撃で頭をぶつけたのか、新出は頭を押さえて深い溜め息を吐いた

偶然にも通り掛かった人々が車の周囲に集まり始めると、ジントウォツカは音もなく姿を消した

「ずらかるぞ……ウォツカ」

「へい、兄貴」

四方や狙撃されたとは夢にも思わず、新出自身が自損事故として届け出た事で、警視庁の交通課に所属する由美はただの交通事故として処理した

この同時刻の目暮は自宅謹慎中……その為みどりがターゲットと

なった

普段通りに買い物に出掛けたみどりは、自宅近くの歩道を歩いていると……

「危ない!!」

「え……あ!!」

突然の声に上を見上げた途端にみどりの頭上目掛けて落下して来る植木鉢が視界に入った

—ガシャン!!—

一瞬の静寂の後、現場周辺は騒然となっていた……

「ちょっと奥さん？大丈夫？」

「大丈夫か!!」

「え……ええ、ああびっくりした？」

「危ないわね」

「ほんと？」

二人を襲った偶然を装った事故……入院中のコナンは未だ気が付いてはおらず、彼の地の最深部では彼による懸命の説得が続いていた

「……優作、未だ続けるのかい？ 今ならただの事故で済む、未だ引き返せるがな」

「ああ、続ける」

相手にその胸中を読ませない、その双眸は怒りの焰が燦り続けた

そんな優作の態度に小さな溜め息を吐いた彼は友人として説得を試みる

「……君らしくないね？ 今回の件で憤る君の気持ちは理解出来る、だが彼は決して喜ぶ事はない、却って怒り悲しむと私は思うがな」

「……解っている、盗一」

「新一はホームズを心酔し犯罪を許さない、真っ直ぐな子だからな……きっと自分の所為だと責めて、私を許さないだろう」

「優作……、最愛の我が子をあそこ迄傷付けられて怒り狂うのは、親として至極当然の事だ。だがな、闇に染まり犯罪者と成り果てた君の姿は見たくない、その怒りは権力にしがみつき命を弄ぶ奴等に向ければいい。違うかい……優作」

「新一君同様に、たった一つの真実を追い求め犯罪を許さない君を、私は良く知っている」

「これ以上の脅迫行為は私怨……ただの犯罪だ」

静まり返り沈黙が支配する室内盗一の説得を受けて自分の闇と向き合う優作

数分間の沈黙の後、盗一が試みた優作の説得は終わりを告げた

「……そうだな、盗一。私はどうかしてたよ？」

冷静さを取り戻し笑みが戻った優作

冷静さを失い愚行に走った愚かな自分を恥じた優作は、普段通りの悠然とした笑みを浮かべた

「それでこそ君だよ、闇の男爵」

最悪の事態を免れる事が出来てほんと安堵した盗一は、奇妙な命令を取り下げるべく携帯を手にとった

「はい、ジンです」

「ジン、脅しはもう良い」

「「解りました」」

電話を切り優作に視線を向けると、ばつが悪そうに苦笑する優作の姿に盗一もまた笑みを溢した

「一体どうなるかと思ったよ？」

「ははは……、済まん済まん？」

「切れた君程、恐ろしい者はない？」

優雅で気品を漂わせる笑顔を常に保つ盗一を見つめていた優作は、ふと表情を翳らせ視線を落とす

「君には本当に済まない……」

沈痛な面持ちで、突然謝罪する優作の口から紡ぎ出された言葉は静寂を破り室内に響き渡った

「それは言わない約束だろう？」

「そうだったな？」

目を閉じて何かを思い出す様に思考の海へと潜る優作は、組んだ手に深く項垂れて深い溜め息を吐いた

「権力者達による違法臓器移植の実態を暴く為に集まった仲間達が何時の間にか歪んで仕舞った……」

「ああ……、何の罪もない若者達の臓器を奪い健康を手に入れる輩は、何時の時代も途絶える事はなく多くの若者達の命が犠牲になって来た」

不甲斐ない自分を責めるかの様に吐き捨てる優作と盗一

「それも、漸く終わりを告げる。国家犯罪を暴く為に生まれた組織にジンが加わった事に依って、大きく変貌を遂げて仕舞った？」

「ジンはどうする？」

「手筈が整った今となっては消すしかないだろう、組織を凶悪化させた張本人であり無断で数多くの命を奪って来た男だ」

「更生するとは思えない、処分は已むを得ないだろうな？」

「ああ……、明朝の決行と同時にジンを始めとする狂犬達を処分しろ。全データは消去、更生の余地があるメンバーは放置して構わない」

「解った、通信衛星への侵入を最優先にするが構わないかな？」

「ああ、ナポレオンやスカイが協力し合って暁と共に突入して来る。タイミングを見計らって決行してくれ」

「解った。いよいよだな、スピリタス」

「その名前で呼ばれるのも最後だな、ブルームーン……明朝の通信衛星の侵入準備に取り掛かれ」

「OK, Boss」

漸く時が満ち闇が蠢き始めた今、甘い酒に酔って来た権力者達の逃げ場は、最早存在しなかった

意地悪

水面下で刻々と準備が進む一方、コナンを危険から遠ざけるべく巧妙に仕組まれた見舞い客が続々と病室を訪れる

その最たるが平次だ

親友が入院したとなれば真っ先に駆け付けるであろうと推理して息子を唆した平蔵

居候先である毛利探偵事務所を出る事にしたコナンの意向に従い、僅かばかりの荷物の運び出しと挨拶に訪れた有希子は然り気無くコナンの入院を知らせた

「入院!!」

「ええ、コナンちゃん車で倒れちゃって入院しちゃったのよ」

驚いて目を丸くする小五郎

「嘘……コナン君が入院だなんて……私の所為でコナン君が……」

自分を責めて涙を浮かべる蘭

そんな一人娘を小五郎は慌てて宥め始めた

「蘭、おめえの所為じゃねえ？」

「ううん、私の所為よ！！ 私が悪いの……コナン君を避けてたからコナン君は入院しちゃったのよ！！」

「ごめんね……コナン君、ごめんね」

顔を両手で覆い泣き崩れる蘭に対し、呆れ果てた有希子はきっぱりとした口調で言い放った

「悲劇のヒロインに浸ってる所を悪いんだけど、コナンちゃんが入院したのは蘭ちゃんに無視されたからだけじゃないわよ」

「え……？」

「有希ちゃん！！」

少々棘のある言葉を言い放った有希子を咎める様に振り返った小五郎だったが、当の有希子はものともせず淡々と言って退ける

「三年前コナンちゃんがここを出ようとした一番の理由はなんだと思う？」

突然の有希子の問いに対して、蘭も小五郎も口を揃えて失恋を匂わす言葉を紡いだ

「え……それはその……」

「そりゃあゝあれだろ？」

「コナンちゃんが蘭ちゃんに失恋したからだって言うの？」

はつきりと言わない蘭と小五郎に代わって有希子はきっぱりと言
って退ける

「違うってのか、有希ちゃん」

「ええ、違うわ」

きっぱりと否定した有希子……小五郎は怪訝な顔で問い返した

「じゃあ、理由は何だってんだ？」

「確かにコナンちゃんは蘭ちゃんを好きだったわ、結婚したい……
とそう思う位にね」

「!!」

有希子に過去形で告げられたコナンの想い、蘭は少なからず衝撃を受けた

「ごめんなさい……」

膝の上で拳を握る蘭

有希子は構わず言葉を紡いだ

「謝らないでいいのよ、ただ単に十歳年下のコナンちゃんが対象外だったって言うだけだもの」

「でも、蘭ちゃんはコナンちゃんを手離したくはなかった、側にいて欲しかった、でも新ちゃんと瓜二つのコナンちゃんを見ている事が辛かった……だから避けたのよね」

「……はい」

まるで尋問されているかの様な有希子の射た言葉に、俯いてただ頷くしか出来ない蘭は有希子が紡いだ言葉に漸く頭を上げた

「その時、蘭ちゃんは一度でもコナンちゃんの事を考えてくれたのかしら？ 第二次性徴期と言う難しい時期を迎えたコナンちゃんの事を少しでも想ってくれた？」

「あ……（そう言えば私、コナン君の事を考えた事なかった）」

目を見開いて茫然と有希子の問いに答える蘭

「想ってくれなかったでしょ？」

「はい……、済みません」

有希子は確認するかの様に問うと小さな溜め息を吐いて微笑んだ

「コナンちゃんね、とっくに蘭ちゃんへの想いにはピリオドを打っていたのよ。まあ、多少は引き摺っていたけどね」

「ちょっと待ってくれよ、有希ちゃん。なら何で坊主は……あ！
！そういう事か！！」

「え？」

「そ、コナンちゃんも男の子だから限界だったのよ。だから距離を置こうとしていたって訳？」

「何時迄もガキじゃねえか？」

有希子と小五郎の会話に付いて行けない蘭は首を傾げて交互に見つめる

「お父さん？」

「……解らねえんらしい？」

訳が解らない自分の娘の幼さに呆れた小五郎は蘭の頭を撫でながら項垂れる様に呟いた

「コナンちゃんは頭良いから余計にね」

「間近にいたんじゃない」

二人の視線を一身に受ける蘭は終始訳が解らず首を傾げるのだった

「あのく???」

「まあ、そう言う訳だから」

「わあった、当面は有希ちゃん家に住むのか？」

「多分そうなるわね、隣に哀ちゃんもいるし、向こうに連れて帰るかはコナンちゃん次第ね？」

「ロサンゼルスに連れて帰るのか？」

「ん、哀ちゃんが一緒ならそうなるわね」

「つてえ事は、坊主の相手は阿笠博士ん所のガキか」

「そうなのよ、コナンちゃんってば漸く自覚したのよ？」

「か、まどろっこしい奴だ？」

「コナンちゃんの恋愛は一目惚れじゃなくて、ワインが熟成する様に想いを深めて行く……そんな愛なもの」

「コナンらしいな？」

（やっぱり哀ちゃんなんだ……、ちょっぴり悔しいな）

完全に蚊帳の外にされた蘭は、一人寂しそうにコナンと過ごした日々を思い出していた

（そう言えば、何時も哀ちゃんと一緒だったっけ）

「悔しいんでしょ、蘭ちゃん」

突然話題を振られた蘭が驚いて顔を上げると、そこには不敵に笑う有希子がいた……

「ねえ、蘭ちゃん、仮に新ちゃんとコナンちゃんが同一人物だとしたらどうする？」

「え……」

「新ちゃんが江戸川コナンになって蘭ちゃんの側にいて守って来たとしたら……どうする？」

「どうって……」

有希子の質問に戸惑い答えに詰まった蘭

「新ちゃんなら恋愛対象だけど、コナンちゃんなら対象外って事は蘭ちゃんの想いは子供の恋愛だったって言う事よね？ 新ちゃんが大変な事件に巻き込まれて、小さな体で精一杯蘭ちゃんを守り通して、蘭ちゃんの幸せを願って新しい恋を祝福したとしたらどうする？」

笑顔で詰め寄る有希子

返答出来ない蘭

小五郎は蘭を静かに見守った

（蘭……）

（新一とコナン君が同一人物だったら？）

（もし……もしもそうだとしたら私は新一を子供扱いして一番残酷な方法で新一を傷付けてしまったと言う事になる……）

（私は待たされて等いない……）

（私が新一を裏切った……）

千客万来

「ほく、漸く自覚したんか」

一通り現在の状況をコナンから聞き出した平次は、親友の小さな変化を見逃さなかった

他人の恋愛事情には鋭い平次は顔を真っ赤に染め上げたコナンを、これ幸いとからかい始めた

「うっせえ?」

「で、もう告ったんか?」

ベッドの縁に腰掛け、漸く訪れた親友の新しい恋路にコナンの頭を小突いて進捗状況を問い詰める平次は、やはり嬉しそうだ

楽しそうに笑ってコナンをからかう平次に、林檎の様に真っ赤になりながらコナンも懸命に遣り返していた

「ま?未だに決まってるだろ?」

「そう言うおめえはプロポーズしたのかよ？」

「俺の事はええやろ？」

「早くしねえと鳶に油揚げかつ浚われるぜ」

「放っとけや？」

「俺はお前程、モタモタしとらんわ？」

「バーロ、俺は気付いたばっかだっつうの？」

「……それもそやな、まあ確り気張れや工藤」

「早よ告らんとちっこい姉ちゃん盗られてまうで？」

「バーロ、んな事させつかよ……」

熱が冷めやらぬ火照った顔を、窓からの冷たい空気で冷ますコナ
ンの姿に平次はほっと胸を撫で下ろしていた

（多少は引き摺るやろけど……もう大丈夫やな、工藤）

賑やかな会話が途切れて暫しの静寂が訪れた頃、扉の外からひそひそ話が漏れて来た

「「ほらね、やっぱり哀ちゃんだったよ」」

「「鈍い奴だぜ」」

「「ほんとですね」」

「「ち？違うわよ？」」

声の主は、コナンの入院を聞き付け駆け付けた、元太光彦歩美と哀そして阿笠博士だった

必死に隠れているつもりなのか？ 扉の隙間からは歩美の制服のスカートが見えておりばれればれた

これに気付かないコナンと平次ではなく、会話が途切れた途端に

見付かった

「何しとんねん？」

「おめーら！！」

当然の如く顔を真っ赤にして怒鳴るコナンを手荒く祝福する三人は、満面の笑みを浮かべて喜んだ

「やっぱり哀ちゃんだったんだ！！」

「鈍すぎるぞ、コナン！！」

「そうですよ！！」

「放っとけっうの？」

コナンは元より、哀も真っ赤に頬を染め上げ阿笠博士の隣で小さくなっている

「良かったの、哀君」

「私は別に……」

涙ぐんで喜ぶ阿笠博士に対し、顔を真っ赤にして否定する哀だったが、当のコナンが押し切られる形で肯定して仕舞い哀の逃げ場はなくなっていた

「早よ、言わんかい」

「そうだよ、コナン君」

「男ならバシッと決めろってんだ」

「灰原さんも待ってますよ」

「う……わあったよ？後で言うって？」

「」「やったあ！！」「」

小さな友人達に囃し立てられて観念したのか、コナンと哀はぽつりと呟いた

「おめえらの前で言えるかっての……」

「お願いだから二人の時にして……」

「あたりめえだ？」

嘗ては対極に位置していた二人

＞犯罪組織の科学者と高校生探偵＜

＞加害者と被害者＜

互いに相容れない出逢う筈がなかった二人、偶然に偶然が重なり
出逢うべくして出逢った二人は、共に手を携えて運命に立ち向かい

……未来を勝ち取ろうとしていた

—コンコン—

（今日は随分と多いな……）

賑やかな病室の扉をノックする音が響き、新たな来客に首を傾げながらコナンは入室を許可した

「どうぞ」

「突然来て申し訳ない、コナン君」

引き戸を開けて入って来たのは、白馬警視總監と小田切刑事部長・松本管理官そして目暮警部だった

錚々たる顔触れに驚いたコナンと平次は、目を大きく見開いた

「「は……白馬警視總監!!」」

驚いて声を張り上げたコナンと慌てて直立不動で敬礼した平次が発した大物の名前に全員が驚きを隠せなかった

「「ええ!!」」

（日本警察のトップが直々に謝罪に来るなんて……）

日本警察の大物と言う訪問客を受けて阿笠博士は慌てて元太達に病室を出る様に促した

「みんな？廊下に出ようかの？」

「それがいいわね……」

無言で頷きそつと病室を出ようとすると、小田切・松本・目暮は阿笠博士と哀達に対して心底済まなそうに謝罪して来た

「済みません……、阿笠さん」

「皆済まんな」

「いえ、構いません」

そつと引き戸が閉じられると、平次が驚きを隠せない儘声を掛けた

「白馬警視總監・小田切刑事部長・松本管理官・目暮警部」

つい先程迄賑やかだった室内は、一転して水が打った様に静まり返り張り詰めた緊張感が支配した

「平次君じゃないか」

同期である平蔵の息子に目を止めた白馬警視總監は、極自然体で声を掛けた

「ご無沙汰してます、白馬警視總監？」

「ああ、そんなに畏まらなくていい。今日は非番かね？」

「はっ？ 今日休暇ですねん？」

「坊主が倒れたて聞いて、慌てて親父に許可もろうたんですわ」

「そうか、お父さんは息災かね？」

「親父は殺しても死なしまへんで」

「相変わらずの様で安心したよ」

「はい、親父も気にしとりましたわ」

「そうか」

一通り平次と挨拶を交わすと、一同は神妙な顔付きでコナンに向き直った

「コナン君」

真っ直ぐにコナンを見据えると……深々と頭を下げた

「この度は本当に申し訳なかった」

「……白馬警視總監」

「捜査に国民を、しかも未成年である工藤新一君や君に協力を要請する事を黙認して来た私の失態だ」

「本当に申し訳なかった」

深々と頭を下げる、日本警察の大物達にコナンは静かな声で頭を上げる様に促した

「白馬警視總監小田切刑事部長、皆様……どうか頭を上げて下さい」

コナンに促され頭を上げると、そこには穏やかな笑みを浮かべるコナンがいた

「目暮警部だけの所為ではありません、偶々私が疲れていただけの事……私の未熟さ故に耐えられなかっただけの事です」

「いや、君は未だ未成年でそれが普通なんだ。例えば君が成人した名探偵だったとしても、体調が悪いコナン君を呼び出した儂に配慮が足りなかったんだ。その上あまりに似ている君達を混同して仕舞い、辛い思いをさせて仕舞った事を申し訳なく思っている」

「申し訳なかった、コナン君」

「だが、決して君の実力を認めていない訳ではないんだ」

「解っていますよ、目暮警部……」

T h e r e f r i e n d s

——三十分後

白馬警視總監一行は、扉の外に待機していた高木美和子渉面警部と共に本庁へ戻って行った

「あっさり許して良かったんか？」

目暮達に未だ怒っているのか、納得出来ない様子の平次は腕を組んでコナンへ問い掛けた

「ああ、もう怒ってねえよ」

「それにしちゃ浮かない顔しとるやんけ」

この九年間、影からコナンを支え幾度となく抗議して来た平次にとって、今回の有無を言わさない謝罪内容に到底納得いく訳もなかった

それもその筈、大阪府警の警部である平次は、警察官と言う立場から事ある度に抗議し続けて来た……と同時に、成長するに連れて

傷付き悲し気な笑みを浮かべる様になった親友を案じて相談に乗り支えて来たのだから無理はない

「……蟠りが消えた訳じゃねえが、何時迄も怒ってちゃガキみてえだしな」

「まあそれが大人の対応やな、白馬警視總監直々に出向かれたんや、ごねて追いつ返す訳にもいかへんし、どのみち日本警察の大損失には代わりあらへん」

「当分の間は、協力する気ないんやろ？」

「……ああ」

窓の外を見つめた儘コナンは、沈痛な面持ちで目を伏せると深い溜め息を吐いた

「今は、組織だけで手一杯だ」

「……ほうか」

数分間、重苦しい沈黙が流れた病室にコナンの声が響き渡った

「なゝ服部、俺って何者なんだ？」

「工藤……」

「俺は工藤新一なのか？」

「それとも江戸川コナンなのか？」

「確かに俺は工藤新一として生を受けた、だが九年前に幼児化して江戸川コナンとなってからは……工藤新一時代より遥かに楽しかったんだ」

「毎日下らねえ会話をして、キャンプや海に行って、探検して暗号解いて、サッカーしたり野球したりゲームしたり、テスト勉強に付き合わされた事も一度や二度じゃねえ」

「殺人事件に巻き込まれる度に危険な目に遭ってるってのによ、あいつ等は全然懲りなくて決まって自分達から首を突っ込むんだ」

「……工藤新一の時にはこんな事なかった、俺は流行りのゲームやテレビは興味がなくて、何時も父さんの書斎でホームズとか世界中

の推理小説を読んだ。自然とホームズの話題や血まなぐさい事件の話ばかりする俺の周囲には誰もいなくなって、学校のダチとはサッカーの話題位しか話が合わず、大抵は推理小説を読むか寝てるかのどっちかだった」

「そんな俺の隣には、何時も蘭がいた」

「ホームズの話や文句を言いながらも聞いてくれたのは蘭だけで、何時の間にか惚れてた」

「俺には蘭しかいなかったんだよ」

「ははは……笑えるだろ？」

「日本警察の救世主と言われた、工藤新一には腹を割って話せるダチはいねえんだ……」

（工藤……）

自分の掌を見ながら、切な気な表情でぽつりと本音を溢す親友に對して、平次は声を掛けられなかった

工藤新一と言う決して逃れられない影に今のコナンは己を保つのに精一杯だった

(……そないに大事なダチなんか、俺本気で妬いとるわ?)

十歳年下の元太達にちよっぴり嫉妬した平次は一際深い溜め息を吐いて最良と言える道を示す

「ほなら江戸川コナンの儘でええやないんか？」

「……良いと思うか？ 服部」

「江戸川コナンは本来なら存在しない人間だぜ？」

すがる様な眼差しで見上げるコナンの真横に腰を下ろした平次は、頭を撫でながら力強く告げた

「俺はええと思うで？」

「道は二つある」

「工藤新一に戻り九年のブランクを埋めて、正体を明かす明かさな
いに拘わらず、あいつ等と少なからず距離を置くか」

「江戸川コナンとして工藤新一の影を背負いながら、あいつ等と生
きて行くか……この場合は正体を明かしても明かさなくても大して
変わらへんやろな」

「どっちを選択するにしてもや、工藤新一は江戸川コナンの影を、
江戸川コナンは工藤新一の影を背負う事になる……後はお前次第や、
工藤」

「まあ、俺と会ったんもちっこうなってからやし、お前の知能指数
と推理力洞察力等、全てが高うて意気投合し、何れ養子なる事を知
ったって筋書きなら、俺がお前の事を工藤工藤って呼んでたん
も説明が付くやろ」

「確かに江戸川コナンは本来ならば存在せえへん、せやけどな工藤、
この九年間江戸川コナンは確かに存在したんや、俺は江戸川コナン
と言う人間は別人やと思うとる」

「どちらを選択しても、お前がお前である事には変わりはないんや
……お前が”迷宮なしの名探偵” ”日本警察の救世主”である事
は、今も昔も変わりはない」

「せやろ？」

”平成のSherlock Holmes”」

親友服部平次の言葉の一つ一つに込められた想い

コナンは目頭が熱くなりながらも懸命に堪えて小さく呟いた

「Thank You……服部」

堪えきれず一筋の滴が溢れ落ち腕で覆って啜り泣くコナンの肩を、
平次はただ無言で抱いていた

（九年もよう耐えたな、工藤）

（犯罪組織に命を狙われると言う死と隣り合わせの日々の中で、お前は自分に関わる人達の命を守り通した）

（普通なら当に発狂しとる所や）

（十七歳と言う多感な時期に全てを失い、苛酷な真実を知って尚も

お前の魂の輝きは失われていない)

”平成のSherlock Holmes”は伊達やないわ?)

(せやけどこいつ、一体幾つの迷宮に迷うとんのや?)

何人たりとも立ち入れぬ空間

平次はターニングポイントを迎えて立ち止まっていた親友が再び歩み始める瞬間を見届けたのだった

「ありがとな……」

「かめへんって、幾らでも相談に乗ったるさかい気にせんでええ」

静寂に包まれていた病室は、泣き止んで照れ臭そうにお礼を言うコナンと、満面の笑みを浮かべる平次の笑い声に包まれていた

コナンと平次が再び他愛もない会話を再開して暫く経った頃、新たな見舞い客が訪れ様としていた……

予想外の見舞い客（前書き）

お気に入り登録&評価&アクセス本当に有り難う御座いますm
しm？
┐

予想外の見舞い客

「Hi, cool guy」

「ジョディ先生・キャメルさん・赤井さん」

「よー、FBIの姉ちゃんやないか」

新たな見舞い客はFBI捜査官のお馴染みの面々で、幾分慌てた様子で病室に入って来た

「良かった、無事で？」

「「は？無事？」」

訳が解らず見事にハモった平次とコナンは首を傾げて顔を見合わせた

「突然ごめんよ、コナン君」

「坊や、元気そうだな（涙の痕跡……知って仕舞った様だな）」

「うん……どうしたの？」

病室に入るなり脱力した面々にコナンは首を傾げて問い掛けた

「どうもこうもないわよ？」

「ジョディ先生??？」

「なんやなんや？何が遭ったんや？」

腰に手を当てて身振り手振りで吐き捨てるジョディに困惑するコナンが益々解らずに首を傾げると、赤井が苦笑しながら事の経緯を説明し始めた

「先程坊やが入院したと聞いてな、もしや奴等が何か仕掛けて来たのかと思って慌てて来たんだ」

「時期が時期だけに、奴等は何をするか解らないからね？」

「まったく、心配したのよ？」

どうやらコナンが入院した事で組織が何か仕掛けて怪我を負った
と思い駆け付けてくれたらしい

「成る程なく、確かにタイミングが悪すぎや」

「ごめんね、心配掛けて？」

多忙なFBI捜査官達に心配掛けて仕舞ったコナンは慌てて謝罪
すると共に笑顔を向けた

「忙しいのに来てくれて有り難う」

「良いのよ」

「コナン君には世話になってるからね」

「まあ、無事で良かった」

ほんと安心して笑みを浮かべるジョディ達はコナンの赤くなった
目元を見逃さなかった

(目が赤いわね……泣いていたのかしら?)

(何か遭ったのは間違いない様だが……)

少し訝しみながら、心配そうな眼差しを向けるジョディとキャメルを他所に、赤井は射る様な、探る様な眼差しをコナンへと向けた

「どうやら迷いを吹っ切れた様だな、坊や」

「うん……、何時からかな……。自分が解らなくなってたんだけどね……」

暫し思案する様に目を伏せたコナンは、ゆっくりと赤井を見据えると、意を決して問い掛ける

「赤井さんは知ってたんだよね？」

儚げに微笑んで眼差しを向けるコナン

何も知らないジョディとキャメルは、赤井とコナンを交互に見据

えながら怪訝な声を上げた

「え……何の事なの？ 秀？」

「コナン君？」

二人の問い掛けに対し、何方も答えない儘、赤井は短く返答した

「ああ……、確証を得られたのは最近なんだがな……」

「……そう」

辛そうに目を伏せて再び沈黙したコナンの傍らには、平次が心配そうな眼差しで寄り添っていた

「工藤……」

「……大丈夫だ、服部。覚悟は出来てっからよ……」

「無理しなや、俺がおるさかい」

「Thank You……」

心配で堪らない

そう言った眼差しで寄り添う平次に、ジョディとキャメルは、
「何事か遭った」……と確信し気を引き締めた上で、深く傷付いているコナンと赤井へ再度問い掛けた

「一体何が遭ったの？ コナン君」

「赤井さん？」

数秒間沈黙するコナンと赤井は確認するの様に視線を合わせると、
二人は小さく頷き合う意味深な言葉を紡ぐ

「今は未だ言えないな……」

「ごめんね……、ジョディ先生キャメルさん」

儚げに微笑むコナンの姿に何も言えなくなった二人は、小さく溜め息を吐いて諦めた様に承諾の言葉を発した

「仕方ないわね？」

「まあ、明日には解るだろうから、もう少し待ってくれないか」

「解ったわ、秀」

「解りました」

こうと決めたら、梃子でも動かないし口も割らない二人を、良く知っているジョディとキャメルは早々に諦めた

先程、赤井が口を滑らせた”明日” と言う言葉を訝しんだコナンは、まさかとは思いつながら口を開こうとした所で平次が遮った

「あ「明日って何かあるんか？」

「服部君は何も知らされてないのね」

「何の事や？」

ジョディの言葉に怪訝な顔を向ける平次と、察しが付いたコナンは鋭い眼差しを向けた

「まさか……、ジョディ先生」

「ええ明日、本拠地に突入する事になってるのよ」

「明日!!」

まさか明日とは夢にも思わず、コナンはシーツを握り締めて詰め寄った

「どうりでSATが騒がしい筈や？」

「気付けよ、てめえ……」

「じゃあないやろ、どうせ親父の箝口令なんやからの」

お手上げの仕草でコナンの抗議をばっさりと切り捨てる平次だったが、見舞い客の多さの訳に気が付いたコナンは、拳を握り締めて抗議の声を上げたのだった

「あ……んの、くそ親父!!」

「そういう事かよ!!」

優作に対して、怒りを露にするコナン

「コナン君？」

「何か遭ったのね？」

「やたら来ると思えば、俺は病み上がりだぞ!!」

「くくく?」

怒りを爆発させたコナンの凄まじさに、ジョディとキャメルは苦笑し、赤井は懸命に笑いを堪えていた

「そう言や……、今日はやたら見舞い客が多かったんやけど、優作はんか有希子はんの仕業やな？」

「大方、病み上がりのお前を疲れさせて、明日は起き上がれない様にするつもりやろな」

呆れ果て起こる気にもなれず、平次は横目で怒り狂うコナンを見下ろした

「絶対に行ってやる!!」

「熱下がった言うても、未だ微熱あるんやで？ 幾らなんでも無理や、何なら俺がお前の代わりに行ってもええで？」

仕組まれた見舞いと知って大人しくする親友でない事を良く解っている平次は、一応説得するもののコナンの決意は固かった

「これは俺の事件だ!! 俺が解く!! おめえは手を出すな!!」

「協力してくれる事には感謝してる。だが、当事者でないおめえを危険に晒す訳にはいかねえ。それに……これは俺がけりを着けねえといけねえんだよ」

「工藤……、けど俺はお前が心配なんや」

何時も影から協力する平次の想いはコナンも良く解っていた……
だからと言って唯一無二の親友を危険に晒す事等、到底出来る筈も
なかった

「Thank You……服部、けどおめえだけは失いたくねえん
だ」

嵐の前の静けさ（前書き）

m お気に入り登録&何時も読んで頂いて有り難う御座います m
〔

コナンが少々甘えん坊になって仕舞いました？

嵐の前の静けさ

——シンと静まり返った病室

滅多に明かさないコナンの想いに誰もが胸を締め付けられた

「……工藤」

「コナン君……」

（親友……か）

暫しの沈黙の後、親友の想いに破願させた平次は一言だけ呟く

「おおきに……、工藤。　けどな俺もお前を失いたくないんやで？」

二人の絆の深さを目の当たりにしたFBIと有希子は、予想外の見舞い客に臍を噛みながら、コナンと平次の深い絆に小さな溜め息を溢した

（ほんと、良いお友達に巡り会えたわね新……ううん、慧ちゃん）

タイミングを見計らい有希子が扉に手を掛けた三十分程前……米花町の毛利探偵事務所では、コナンの荷物を受け取った有希子が、ビル前の路上で小五郎と向き合っていた

「コナンちゃんがお世話になりました」

「良いつて、有希ちゃん？」

有希子の言葉に囚われた蘭を見かねた小五郎は、一言言いたそうに溜め息を吐いた

「あら、事実でしょ？」

何時もの明るい笑顔で、ウインクを飛ばす有希子に対し、無駄だとは思いつながらも小五郎は苦言を呈した

「だからと言って、あれはねえだろ。まあ、事実ではあるかな？」

「母親として、息子を傷付けた、蘭ちゃんの行動は許せない……、それに、嘘は一言も言ってないわよ」

厳しくとも事実を言い放つ有希子に小五郎は否定せず同意の意を示した

「わあってるよ、有希ちゃん」

「恋愛は待っただけじゃ駄目だ……惚れた相手を手に入れたいならば自ら行動を起こさなきゃなんねえ、本気で惚れたなら尚の事だ？」

「そうよ、英理ちゃんの為も、小五郎君も素直になりなさいね」

「有希ちゃん？」

予想外の言葉に、顔を真っ赤に染め上げた小五郎は遠ざかる車を見つめて、ぽつりと呟いた

「まったく、わかってらあ？」

小五郎が踵を返してビル内へと入って行った頃、車内の有希子は何時もの明るい笑みを浮かべて、悪びれもなく言い放った

「これ位の意地悪は許されるわよね」

細やかな意地悪かどうかは疑問が残る所だが、車は工藤邸へ立ち寄った後米花総合病院へと向かい、コナン達の会話を聞いて仕舞うのである

「……わあっ たよ、服部？」

数秒間の睨み合いの末、平次の熱意にコナンが折れる形になり、本拠地突入に参加する事になった

「けど仕事は大丈夫なのか？」

「ああ、三日程休暇くれたんや」

「ほく粹な親父さんだな」

「そうね、心配で堪らないでしょうに」

「そうですね」

「FBIとしても危険な目には晒したくはなかったが、二人の決意

の固さに説得を諦めて本題へと入って行った

「じゃあ、二人とも覚悟は出来てるのね？」

「「ああ」」

「突入は明朝の夜明けと同時だ」

「場所は杯戸港だから、直ぐ解ると思うよ」

「「解った」」

大きく頷き気持ちを引き締めたコナンと平次は、作戦等を打ち合わせて若干の修正を加えた後に、未だに詳細が解らない研究分野へと切り込んだ

「そう言や、AHTX4869ちゅう薬の目的とか解ってへんのか？」

「バーロ、AHTX4869じゃねえっうの。APT4869だ、APT4869」

「細かい所、気にするやつちゃ？」

「てめえが間違えるからだろうがよ？」

息の合った二人の会話

気配を殺して聞いていた有希子はタイミングを見計らって扉を開けると、口を開き掛けた赤井を止めた

「ああ、大体は判っている」

「一体、どんな目的があるんや？」

「それは「そこ迄にして下さる？」
赤井さん」

「工藤さん、解りました？」

扉を開けて入って来た有希子に全員の視線が集まり、有無を言わずそれ以上の発言を阻止する

「母さん!!」

「真実は自分自身の目で確かめなさい、慧一」

「母さん？」

少し悲し気な眼差しを向ける有希子の姿に、コナンはそれ以上の質問は出来なかった

「……解ったよ」

「まったく、心配ばかりさせて？」

「行くのね？」

「ああ、けりを着けてえんだ」

「解ったわ、外出許可を取ってあげるから今日はもう休みなさい」

こうと決めたら決して譲らない息子だと言う事を良く知っている有希子は諦めて就寝を促した

「そやな、俺も本庁行かならへんし？」

「じゃあ、我々はこれで失礼します」

「お忙しい所を有り難う御座いました」

「いえ、奴等が何か仕掛けて来たと思ったんですが無事で良かったわ」

「では失礼します」

「わざわざ有り難う、明日ね」

「ええ」

「ほな、早朝迎えに来るさかいな」

「おう」

平次達が丁寧にお辞儀をして病室を後にすると、コナンは複雑な眼差しを有希子へと向ける

「母さん……」

「明日……、全てが終わるわ」

「今は休みなさい」

「……信じて良いんだよね？」

コナンの口から思わず溢れた言葉……：すぎる様な眼差しに、有希子は慈愛に満ちた笑みを向けた

「当たり前じゃない」

熱を持った額にコツンと自分の額をくっ付けて熱を計った有希子は母親以外の何者でもなかった

「未だ少し熱があるわね。今晚は良く寝て、明日に備えて備えて」

そう言って濡らしたタオルを額に乗せて丸椅子に座ると、ちよっぴり不安になっているコナンを眠りに誘う

最後になるかもしれない優しい母の掌の温もりに安心したコナンは深い眠りに就いた

コナンが眠って暫く経った頃、着替えと阿笠博士の夕食の為に一旦自宅に戻っていた哀がそっと戻って来た

「あら哀ちゃん、ごめんなさいね」

「いえ……」

「慧ちゃん、やっと眠ったのよ」

「色々ありましたから……」

コナンの枕元へ佇み寝顔を見下ろす哀に、有希子は渡しそびれていた物を手渡した

「哀ちゃん、これを渡して置くわね」

「!! これは戸籍謄本？」

「阿笠玲美……」

「お母様と明美さんの名前から一音ずつ頂いたの、お母様達に分迄生きて幸せになってね」

「有り難う御座います……本当に」

戸籍謄本とパスポートを受け取った哀の双眸から涙が溢れ落ちた

隠された真実（前書き）

真実へのC u n t d o w n 共々、お気に入り登録有り難う御座いま
す m (m

蘭ちゃんの長台詞です

隠された真実

有希子が帰った後……

茫然と自室に閉じ籠った蘭は、有希子が言い放った言葉に囚われていた

脳裏に有希子のあの言葉が蘇り、例え話がまるで、打ち明け話をされたかの様に響き渡る

一仮に新ちゃんとコナンちゃんが同一人物だとしたらどうする？—

—新ちゃんが江戸川コナンになって蘭ちゃんの側にいて守って来たとしたら……どうする？—

—新ちゃんなら恋愛対象だけど、コナンちゃんなら対象外って事は蘭ちゃんの想いは子供の恋愛だったって言う事よね？ 新ちゃんが大変な事件に巻き込まれてて、小さな体で精一杯蘭ちゃんを守り通して、蘭ちゃんの幸せを願って新しい恋を祝福したとしたらどうする？—

有希子は例え話をしたのであって、打ち明け話をした訳ではない

それは蘭も良く解っていた

だが、蘭には有希子の例え話が事実に見えるならなかった

それもその筈、有希子の例え話があまりにも現実と符合する為である

（もし……もし本当だったとしたら？　コナン君が新一だとしたら？）

（命を狙われてて正体を隠す為に小さくなっていたとしたら？）

（大人びた言動も、あの推理力・洞察力・観察眼も、服部君が会う度にコナン君を工藤と呼ぶのも……）

——全ての辻褄が合う

この時の蘭の脳裏には、コナンとの思い出の数々が走馬灯の様に駆け巡っていた

事件に遭遇する度に事件現場を彷徨いて、誰もが気が付かない事

に気が付き的確なアドバイスをして来たコナン

元々コナンの正体を何度も疑って来た蘭は直ぐに訝しみ始めた

（やっぱり……コナン君は新一？）

（コナン君は何時も私を守ってくれた……、高木警部が撃たれて記憶をなくした時もホームに突き落とされた私を助けてくれたよね）

（難しい事とかいろんな事知ってて、自分が危険なのに何時も自分の事は後回しで命懸けで助けてくれて、私が泣いていたら慰めてくれたよね）

（そんなコナン君が新一みたいで格好良くて……なのに……なのにどうしてコナン君を好きにならなかったんだろう）

（ごめんね……コナン君）

ぼろぼろと溢れ出る涙を拭う事もせず、ただ泣き続け自分を責める蘭

そんな一人娘を小五郎は黙って見守り続けた

(……本当はコナンに期待したが流石に年の差が有りすぎるか?)

(ま、こればかりはしゃあねえ?)

男手一つで育て上げた蘭を手離したくない小五郎、蘭がコナンを
選ぶ事を期待していたのだが……それは泡沫の夢だった

そんな父親の叶わぬ願いを他所に、蘭は有希子の言葉を振り返る

(でも……本当にコナン君が新一だったらどうしよう、ずっと側に
いてくれたのに、私が待たずに裏切った事になるんだよね?)

(確かに瓜二つだけど……)

(あ、でも……確かあの時だけは新一とコナン君が同時に存在した
んだっけ、それ以外はどちらかがいなかった)

(コナン君と新一が同時に存在した文化祭のトリックさえが判れば、
コナン君と新一は同一人物の可能性が高くなるわね)

（思い出すのよ、あの日のコナン君の一挙手一投足を思い出さなきゃ……）

九年前の記憶を必死に掘り起こす蘭、楽しかった事も辛かった事、様々な記憶が今も尚鮮明に脳裏に浮かぶ

（あの日は退院した日で、コナン君は風邪を引いてずっとマスクをしてて外さなかったのよね……）

（そうそう、文化祭から帰って来て直ぐに寝ちゃってご飯食べなかったんだっけ、朝御飯も寝坊して食べなかった……）

一つずつ手懸かりを思い出して疑念を深めて行く蘭は最大の疑問に突き当たった

（あれ？　ちょっと待ってあの時のコナン君、一度もマスクを取ってない？）

小さな欠片が嵌まり、欠けていた欠片が次々と埋まり始める

（嘘……私、あの時のコナン君の顔を見ていない）

（今思えば、あの時のコナン君は普段のコナン君と様子が違ってた、絶対にマスクを外さなかったんだっけ）

（まさか……本当に……「新一？」）

頭を抱えて、懸命に思い出す蘭

「もっと手懸かりを思い出さなきゃ……、何かある筈よ……何か、新一が関わった事件にヒントがある筈よ」

沢山の事件に巻き込まれて来た蘭とコナン、数多くの事件の中でも新一絡みの事件は極僅かしかない

（一番印象に残ってるのは、文化祭の事件……そうだ、大阪に行った時にコナン君が私を庇ってさされた事件があったんだ。その時にコナン君、服部君のお守りの中の鎖で助かったんだっけ……あれ？）

（あの鎖に付いた指紋を取った事あったよね……、東奥穂村から手紙が来て服部君と一緒に行って、新一の名誉を失墜させて社会的に抹殺する為にそっくりに整形して罪を犯した人がいたじゃない。あの時、犯人が新一じゃないって証明する為にあの鎖の指紋を使ったのよ）

（あの鎖に付いているのはコナン君の指紋の筈……見付けた）

（動かぬ証拠を見付けたわ）

（後は物証、指紋を照合すれば……でもどうやればいいの？）

この時の蘭の脳裏には、あの時新一が述べたあの言葉が蘇っていた

お守りの鎖に付いた、コナンの指紋を使って平次が新一の無実を証明した時に、バルコニーから入って来た新一が述べた言葉

ーそれは人間が生まれながらにして天より授かった終生不変のーエンブレムー。万人不同である為犯罪捜査に於いて最も信頼度の高い証拠と成り得る痕跡…指紋なんだろうー

この言葉を思い出した蘭は、直ぐ様二階の事務所に飛び込むなり、元刑事である父親を問い詰めた

「お父さん!!」

「どわ？ な？何だ？」

驚いて椅子から転けそうになる小五郎に構わず、蘭は襟元を締め上げると有無を言わさず迫った

「指紋照合の仕方を教えて!!」

「は……はい? (こ……怖え?)」

蘭の気迫に圧倒された小五郎は深い溜め息を吐くと、指紋照合に必要な物を蘭に持って来させたのだった……

「何なんだ、ったく?」

「パソコンとスキャナー一式、照合したい指紋が付着している物と指紋を付着させるプラスチックの様な透明な板、後はパフの様な物を持って来い?」

「解った?」

「えーと、ベビーパウダーと下敷きと」

直ぐに用意を整えている愛娘の後ろ姿を見ながら、小五郎は一際

大きな溜め息を吐いたのだった

(はあ、さっきのあれだな?)

「やれやれ？」

真摯な想い

あつと言う間に小五郎の机には様々な物が集まり、蘭は食い入る様に小五郎が操作するパソコンに見嵌まった

「つたく、有希ちゃんの話は例え話だろうか？」

「だって、証拠を見付けたんだもん!!」

「証拠だと？」

怪訝な顔を向けた小五郎に蘭は大きく頷いて肯定した

「うん、コナン君が大阪で刺された事覚えてる？」

「大阪で坊主が刺されたって確か沼渕とか言う男に刺された時の、あれか？」

「うんそう、コナン君が刺されたけど服部君のお守りの中に入っていた鎖に嵌まって助かったでしょ？」

「ああ、それがどうかしたのか？」

「その鎖に触ったのはコナン君なのに、東奥穂村に行った時に服部君は鎖に付いた指紋を、新一の指紋として指紋照合を頼んで別人だと証明したのよ」

「ちょっと待て！！　じゃあ何か？　コナンは探偵坊主だったのか！！」

「うん、文化祭の時はどっちもいたけどコナン君はマスクを絶対に外さなかったもの」

「ああ、キャンプに行つて撃たれた時か」

「そうそう、あの時のコナン君はご飯も食わずに学校に行っちゃつて、普段のコナン君とは何処か違ってたし、あの時は哀ちゃんがいなかったから……」

「阿笠博士ん所のあのガキが身代わりになってたって訳か？」

「うん」

「確かにどっちも辻褄は合うが……まあ、やるだけやってみるか？」

「有り難う、お父さん!!」

「その代わり、一致したら……」

「うん、解ってる。例え許してくれなくても、ちゃんと新一に……コナン君に謝ってけじめを着けるよ」

「お前がそう覚悟を決めてるならしゃあねえな？」

頭をがりがり掻きながら小五郎が指紋認証ソフトを立ち上げて、採取した江戸川コナンと工藤新一の指紋を読み取り照合した結果は……

パソコンの画面上でコナンと新一の指紋が完全に一致していた

「新一……」

「マジかよ……、じゃあ一体……何でまたあんな体になったってんだ？」

「有希ちゃんが言ってた事が本当だとすると、何者かに何だかの毒を飲まされたってのか？」

「時々戻ってたのは、その毒物の解毒剤かなんか飲んでたって事よね？」

「恐らくな？」

「東奥穂村で苦しんでいたのは、時間切れで体がコナンに戻ろうとしていたって所だろ、その所為で探偵坊主の体を高熱と激痛と激しい動悸が全身を襲っていたんだ」

「高校生の体が小学一年生の体に縮むんだ……まさに探偵坊主は、命懸けで帰って来ていたんだ。解毒剤かなんかで工藤新一に戻り、時間切れで再び江戸川コナンに縮んだんだろう」

「私が帰ってこいって言ったから……怒って泣いてばかりいたから新一は私を安心させる為だけに、命懸けで帰って来てくれたのよ」

「私の所為で新一はあんなに苦しんだよね……私が新一を苦しめてたんだ……ごめんね……新一」

ついに辿り着いた衝撃的事実に蘭も小五郎も、暫し茫然とパソコン画面を見据えていた

「まあどうりで大阪の探偵坊主が工藤って呼ぶ訳だ？」

「服部君は新一だと知ってたのよね。　どうして私には言ってくれなかったのかな……」

ぽつりと悲しそうに呟いた蘭に小五郎は溜め息を吐いて言い放った

「あのな、おめえが一番危険なんだぞ？　言える訳がねえだろうが？」

「お父さん、でも私なら平気よ!!」

「馬鹿野郎!!　あの探偵坊主が九年も掛かった相手だぞ？　危険で生半可な相手じゃねえって事だ!!　お前の空手もプロには通用しねえんだよ!!」

「あ……」

「蘭、あいつはおめえを始めとする俺達を守る為に欺き通したんだ。

その気持ちをくみ取ってやれ」

「お父さん……」

「そりゃあ、父親としてはおめえを泣かせたあいつに腹が立つさ、
だがな、同じ男としては理解出来る」

「うん、ごめんね……新一」

小五郎に一喝された蘭は肩を震わせて啜り泣き始め、新一を待て
なかった自分を責め続けたのだった

「ごめんね……新一」

「今日はもう面会時間を過ぎてるな、気持ちが落ち着いてから見舞
いに行くか？」

「うん……」

ソファ―に力なく座り項垂れる蘭の隣に腰を下ろした小五郎は、
謝罪の言葉を口にしながら啜り泣く蘭を何時迄も宥めていた

——同時刻

米花総合病院を後にした平次は一際大きな溜め息を吐くと、先程病室での出来事を振り返っていた

（地位も名誉も名声もダチも惚れた女も体も名前も家も親も……あいつは命以外の全てを失うて、俺やガキ共と出会って、楽しいやなんて……）

（あいつはどんだけ孤独な十七年を送って来たんや……その上……実の親が全ての元凶やなんて……あまりにも残酷過ぎるで……）

（この上何があるって言うんや？）

（もうええやないか……な、工藤）

（お前はようやったやないか）

（これ以上、何をせならんのや）

（どんだけ傷付けばええんや）

(……俺はお前に何も出来へん)

(ただ……こうして話を聞いてやる位しか出来へん……堪忍な……
工藤)

(俺で良かったら幾らでも聞いたるよって……堪忍な)

夕闇に包まれ様としている冬の空を見上げる真実を映す双眸

夕陽に照らされて静かに煌めいていた

「なあ工藤、お前がちっこうなって……俺が嬉しいって言ったら怒るか？」

「お前がちっこうなったさかい、俺等は出会ったんやで？ けどな
工藤、出来る事ならもう一度だけお前と肩を並べて推理したい」

「もう何れ位しとらんのやろなく解毒剤がもう効かんで言うった
さかい、もう無理なんやろな」

寂しそうに呟いた平次の願い

コナンには決して言えないであろう切なる願いを、米花総合病院へ戻って来た所で偶然にも聞いて仕舞っていた哀は涙を溢した

（私ってば、貴方達のキューピット役になったのね）

（比類なき、東西の名探偵の出会いに……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0581x/>

虚像の追跡者-Pursuer-

2011年10月11日01時49分発行